



Title	米国小学校における父母の参加に関する一考察 : ミシガン州のある小学校の事例より
Author(s)	高田, 菜穂子
Citation	社会教育研究, 30, 63-70
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/49200">http://hdl.handle.net/2115/49200</a>
Type	bulletin (article)
File Information	Takata.pdf



[Instructions for use](#)

# 米国小学校における父母の参加に関する一考察

—ミシガン州のある小学校の事例より—

高 田 菜穂子\*

## 目 次

1. はじめに	63
2. 問題の所在	63
3. ウッドワード小学校の概要	64
4. リーダーシップ：校長と父母	64
5. 考察	67
付録資料	68

## 1. はじめに

米国でも教育は常に論議の対象になっており、貧困問題や学力低下を解決する方策として学校選択の自由化や学校委員会設置による分権化等、さまざまな改革がおこなわれている。また、学校における父母の参加が子どもの学力向上に役立つ要因として叫ばれている。本稿では、父母の参加を中心に米国中西部の中規模都市カラマズーのとある小学校の改革を考察課題とする。同校ウッドワード小学校は、貧困層の多い小学校である。ここの現場で行われた改革と父母の活発な参加の実例をとりあげ、父母参加の役割と意味を考察する。

## 2. 問題の所在

U・ブロンフェンブレンナー<sup>1</sup>の見解など、あるいは多くの研究が述べるように、家庭と学校、友人関係、そして取り巻く生活環境は、子どもの発達に大きな影響をおよぼす。R・パットナムは、コミュニティの社会関係資本（支援的な社会的ネットワーク）の重要性に特に注目し、PTAを事例に父母参加の衰退を憂慮している<sup>2</sup>。

---

\* 修士課程 2003 年修了

一方で T・スコッチボル<sup>3</sup>は市民参加の変容を指摘し、旧来型組織の PTA の限界を語る。ただし、彼女はその先に、新たな市民参加の姿を展望している。

本稿では、上のウッドワード小学校のケースをたどり、父母の学校参加の役割と意味を吟味する。

### 3. ウッドワード小学校の概要

ウッドワード小学校は、米国中西部ミシガン州のカラマズー市の中心部に位置し、生徒数約 330 名の中規模校である。19-20 世紀転換期に形成された住宅街にあり、給食費減免家庭の割合が 73% を占める。この数字は市内 15 公立小学校中もっとも高い域にある。1995 年度の州内統一学力テスト<sup>4</sup>の生徒の平均点は最低ランクにあった。

年度ごとの概要は次の通り。それぞれの年度の詳細は付録資料に添付。

#### 《ウッドワード小学校の動向の概観》

	年代	校長	教育長	PTO プレジデント	MEAP スコア(得点) (算数)/(学区平均)	MEAP スコア (リーディング)
停滞期	95-'96	チキータ・エルモア・バービー	フランク・ラプリー	不明	28.5 / 52.0	22.4 / 40.6
準備期	96-'97	クリスティー・エンストロム	ケイ・ロイスター	コニー・ボーマン	37.5 / 53.7	37.5 / 41.9
前進期	97-'98	同上	同上	コニー・ボーマン	59.1 / 68.7	50.0 / 57.3
実現期	98-'99	同上	同上	テレサ・デントン	77.4 / 68.5	51.6 / 57.0
移行期	99-'00	同上	同上	ブライス・ディッキー	81.8 / 72.4	52.3 / 55.9

### 4. リーダーシップ：校長と父母

1996 年、C・エンストロムは、ウッドワード小学校の再生に使命をみいだす<sup>5</sup>。校長に応募し選出される。米国各地域では市の教育委員会から学校単位の学校委員会へとさまざまな権限が移譲されている。ウッドワード小学校でも校長選出の過程に父母が参加し大きな役割を果たした<sup>6</sup>。

新校長はマグネット・スクール<sup>7</sup>の特色を生かして精力的に学校改革をすすめた<sup>8</sup>。複数学年を統合したクラス編成やチーム・ティーチング、独自の英語教材・教授法の採用、テレビ放送スタジオの設置や理科への重点的な取り組みなどがあげられる。また個々の子どもたちの問題の具体的な解決をめざして、副校長・カウンセラーの代わりにホーム・サポート・スペシャリストとビヘイビア・スペシャリストを配した。

新校長およびこの新たなプログラムに賛同して多くの教員たちが集った。

父母活動も活発化した。父母が学校改善計画委員会や戦略計画委員会のメンバーとして将来的な学校のビジョンの策定にも積極的に加わるようになった。彼ら彼女らの PTO<sup>9</sup> (Parent-Teacher-

Organization) はプレイグラウンド (運動場の遊び場) の建設活動にも乗り出す。3年をかけ計画し実現をみた。

このプレイグラウンドの建設に特に注目したい。というのは、その活動規模と父母・子どもたちへのインパクトが画期的と思われるからである。木製の舞台や滑り台・古タイヤのぶらんこなどの遊具からなる充実したプレイグラウンドのための建設作業はほとんどボランティアでまかなわれた。設計・材料費は約3万ドルが投入された。父母らのファンドレイジング (建設資金集めの活動) が柱をなした。具体的にはスーパーマーケットのポリ袋・空き缶回収、本・花・クッキー・ピザなどのバザー活動を3年間にわたり続けた。遊具として使う古タイヤの運搬も母たちが行った。本格的な建設作業は市職員や大学生、青年会議所のメンバー、そして父母や教員の家族など、4日間連続で成就した。土曜日の最終日 (1999年4月17日) には、差し入れのスープの鍋が並び、多くの父母・子どもたちが木製遊具にやすりをかけ、土をならし、声をかけあいながら働いて、完成を喜んだ。通常のPTOの会合には顔をださない父母の姿も多くあった。子どもたちには大人気で、放課後も子どもたち、親たちがプレイグラウンドに集う様子が日常になった。学校との自然なかかわりを可能にしたこのプロジェクトの意味は大きい。

1996年の改革以降、生徒の学力も向上する。

校長とPTO活動の中心にいた2人の父母のインタビューから、両者の活動の特徴を以下にまとめた。父母の一人は先のF・コ克蘭。いま一人はT・デントンである。デントンはマグネット・スクールのプログラムに興味を持って別の公立小学校から子どもを転入させた当初から父母活動に積極的にかかわり、98年度にはPTO会長を務める。同時にボランティア・コーディネーターの職につく<sup>10</sup>。なお、F・コ克蘭は長く校区の住民であり、90年代前半からPTOのメンバーで、97年度・98年度は会計を務めた。

	校長 (エンストロム)	父母 (デントン/コ克蘭)
活動領域	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 長期・短期的なプランの構想と策定</li> <li>● 子どもの学力向上をめざした教授法や教材の理解と教員への指導</li> <li>● 子どもへの規律 (しつけ) の指導 (役割モデルも含む)</li> <li>● 理想を実現するための財政的裏付けとなる助成金申請</li> <li>● 父母や教育委員会への情報提供</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● (長期・短期的なプランの構想と策定)</li> <li>● 学校が及ばない領域での子どもにかかわる環境整備 (プレイグラウンド造成など)</li> <li>● 教員・スタッフと父母の間の情報伝達・相互理解の橋渡し役</li> </ul>
活動のスタイル	校長がリーダーシップを発揮し、学校改革の明確なヴィジョンを持って教員をトレーニング	同じ親同士として、活動への参加不参加や仕事の進め方についてそれぞれの考え方を尊重する。意見の違いの收拾も責めあうことなくグループ内のメンバーでサポートしながら解決。

<p>活動の源泉にかかわる発言</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● “親が低所得や低い教育レベルの子どもたちは他の子に比べて成績が悪い、という見方は冷酷で誤ったステレオタイプです。私たちは「この子たちはこれから学ぶのよ」という姿勢でかかわります。”<sup>11</sup></li> <li>● 「ここには多くの人がもっているようなお金、休暇旅行、コンピュータ、家などに恵まれない子どもがたくさんいます。ですから私たちはすべての子どもたちがベストをつくすように必死に働きます。なぜなら私たちはこの子たちにとって教育は貧困から抜け出す切符だと信じているからです。」<sup>12</sup></li> <li>● 「幼稚園の頃から大変で、少しずつ良くなってきている2年生の生徒が校長室の机に腰かけて、『ママが高校卒業したらカラマズー・カレッジにいくといいつて言うんだ。』と話してくれました。『それはいい考えじゃない?』と答えながら、彼や母親がそんな話をするなんてすばらしい、と思いました。」<sup>13</sup></li> <li>● 「理科実験室で、あまり学校に来ない、通常のテストでは点数の低い生徒が、クラスの皆の前で実験について誰よりも上手に理路整然と説明してくれました。ほとんど泣きそうになりました。こんな素晴らしい子が誰にも気づかれずにいたんです。」<sup>14</sup></li> <li>● 「学校への評価は、学力テストの結果のみでなく、年度末に各家庭に満足度調査をおこなっています。これはウェスタンミシガン大学の教授もかかわっています。」<sup>15</sup></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「共通のゴールをもって、何かいいことをしている、その一部になって役立っていると感じた。」<sup>16</sup></li> <li>● 「彼女(テレサ)がいたから、いろいろなことができた。」<sup>17</sup></li> <li>● 「プレイグラウンドをつくった後に引越した父母と偶然再会してプレイグラウンドの話をしたりする。」<sup>18</sup></li> <li>● 「ふつうは校庭の遊具ではもう遊ばないと思える6年生たちもプレイグラウンドで楽しそうに遊んでいる。別の学校に通う近所の生徒も遊びに来る。」<sup>19</sup></li> <li>● 「学校行事が終わった後もまっすぐ帰らずにプレイグラウンドで過ごす家族がいる。それまではなかったこと。」<sup>20</sup></li> <li>● 「車をとめて、プレイグラウンドを見ると、私たちがつくったんだ、と感慨がある。」<sup>21</sup></li> <li>● コ克蘭が他の熱意のあるボランティアたちから傑出していたのは、割り当てられた役割に加えて、労力のかかるありふれた日常的な仕事のほとんどを快く引き受けてこなした点にある。彼女はプレイグラウンド造成のための150人のボランティアたちのために個人的に弁当をつくった。<sup>22</sup></li> <li>● オープンハウスの時に皆にアイスクリームを盛り付けるのを引き受けた母親の子どもが「僕のお母さんがアイスを盛ってくれている」と得意げだった。</li> <li>● 「PTOは皆をじゅうぶん取り込んでいないのでは、と議論になった時があった。私たちがかかわることは、良くないこと? 仲良くなることに罪悪感をもってしまう。」</li> <li>● 「他の小学校に行ったが、親の姿は見えなかった。ここではいつも親が子どもの送り迎えに来て先生とも関係をもつ。」</li> <li>● プレイグラウンドのボランティアに来た人たちは、単なる近隣住民というよりも、父母の誰かが知り合いに声をかけて集まった人たちが多かった。</li> </ul>
---------------------	--	---

## 5. 考察

学校選択制度は、父母を顧客化する制度と思われがちだが、ウッドワード小学校の事例は、父母の参加インセンティブが際だつ事例と思われる。これは黒崎がニューヨークのイーストハーレムの事例について述べた部分と共通する<sup>23</sup>。実験的な教育活動を望む父母たちがマグネット・スクールという制度の学校選択を通して参加を果たした。もともと校区の住民である父母と、新たに参入した父母が混ざり、学校・校長を選び、活動に深くかかわる。参加の機会は PTO のなかで多岐にわたった。先述したプレイグラウンド建設、他にもエコロジーに配慮したサイエンス・ガーデン（校庭）の造成、算数や国語をテーマにした家族ぐるみのイベントなどである。また、学校改善委員会、戦略計画委員会—これらは PTO よりも学校運営への関与度が高い—を選ぶ父母もおり、選択肢が広がり、参加層は厚みを増した。

長く深くかかわりあう過程で、父母、校長、および現場教員のあいだに有機的な協働関係が築かれたと思われる。これは、J・エプスタインが提唱する父母の学校参加を増やすための学校からのさまざまな働きかけの実践的な手引き（エプスタインの理論はミシガン州教育局のホームページ<sup>24</sup>にも掲載され、推奨されている）とは異なる。換言すれば、活発に学校参加に関与を求める父母層が、他の父母や教員にも影響を及ぼしたとできる。つまり校長のリーダーシップの域にとどまらない、さらに豊かな教育活動・学校環境が実現したのではなかろうか。本稿で取り上げた父母、T・デントンと F・コ克蘭のリーダーシップ・スタイルは、校長のスタイルとは異なっている。

パットナムやクロウフォード&レーヴィット<sup>25</sup>らの研究は、個別の学校単位の活動にとどまる PTO について否定的である。論拠は、全国組織の PTA であるからこそ、広い視点で、かつ政治的にも影響を及ぼすことができる市民参加ができるというものであるが、現場からすると、納得しがたい点が多い。ウッドワード小の PTO は一現場組織にとどまるが、先述のように高い成果をあげた。会費すら求めない。

PTA にしろ PTO にしろ、父母活動がここ半世紀で低迷傾向にあることは否定できない。ただし、多忙さを増す中で時間をやりくりして活動に参加する父母の姿は、現在も各所でみられるのである。したがって、市民参加の現在の状況について、スコッチポルの希望の見解は傾聴に値する。「旧来の広範な目的をもつ組織の社会的・公共的・慈善的な活動が現在は特性ごとに分かれて、ゆるやかな関係の中で効率的にフレキシブルに行動できるようになった<sup>26</sup>。」仕事や生活に従事しながら暮らす父母たちの PTO 活動は、当事者にも子どもにも生涯の貴重な経験・記憶として生かされることになると思われる。

## 付録資料

### Woodward 小学校 時期ごとの概要<sup>27</sup>

#### < 1995 ~ 1996 > 停滞期

- 当時の校長のもと、副校長やスクールカウンセラーが配置されていたが、校長と副校長の関係は必ずしもうまくいっていなかったといわれる。
- 子どもたちの行動や態度に問題が見られ、校長はうまく指導できていなかった。子どものけんかに割って入った教師がなぐられる事件も起こる。
- マグネット・スクールへ移行する計画策定のためのコミッティーが毎週開かれた。父母の参加は2名のみで、あとは教員と大学の教員がメンバー。校長が書類を作成し、父母はサインするというような、形式的な参加。
- F・コ克蘭は私立の学校へ子どもたちを移そうかと探し始めていた。
- PTO 活動は、年に数回役員会が開かれるもので、グループに所属しているという感じがしなかった。
- MEAP テストの点数は、市の小学校の中で最低、かつ前年より悪化した2校のうちの1校だった。
- 教育長が年度末で交代するにあたって、突然、新教育長が校長を変える方針を出した。募集に対し1名のみ応募し、父母も含めて面接を行った。C・エンストロムが面接委員からも教育委員からも承認された。
- その後募集過程に不備があったという理由で承認は取り消され、再募集となったが、誰からも応募なし。
- コ克蘭は教育委員会におもむく。担当者に、せっかく適任者を選んだのに無効になったことの落胆を伝える。担当者はエンストロムの連絡先をコ克蘭に渡し、コ克蘭はエンストロムにぜひ再び応募するように伝える。
- エンストロムが新校長に選ばれる。

#### < 1996 ~ 1997 > 準備期

- エンストロムが着任。マグネット・スクールに変わる準備。新たな教員も採用。継続教員は3名のみ。マグネットスクールの方針 (Multiage, Continuous Progress) に興味を持つ新教員たち。エンストロムの前任校から2名。副校長、カウンセラーに代わって、ホーム・サポート・スペシャリストとビヘイビア・スペシャリストが配置される。
- PTO の会長はC・ボーマン (翌年も)。市から学校へ14,000ドルのプレイグラウンド (運動場の遊び場) のための補助がでることになった。教師のリッキーが木製遊具の遊び場がいいのでは、と提案。ボーマン以外のPTOメンバー5人とリッキーが毎週集まって計画を練る。5人のメンバーの親密度深まる。

#### < 1997 ~ 1998 > 前進期

- マグネット・スクールとなる。1~2年生が年齢を混合させた Multiage のクラス編成。リーディング (国語) では学区共通の教科書ではなく Success For All (SFA) という、少人数達成度別クラス編成の言語教材の使用も始まる。
- マグネット・スクールへの転換に伴い、学区外からの児童の受け入れ開始。PTOにも新しく入ったメンバーが加わり、参加人数が増した (T・デントンも)。

- 以前プレイグラウンドをつくった経験のあるリンカーン小学校のPTOメンバーに話を聞きに行く。
- 年度の終わり近くにリッキーが理科の学習に役立つ‘ガーデン’のプランをPTOに提示。PTOメンバーのA. デュウエイクが財団や企業に助成を申し込む書類を作成。その後デュウエイクはガーデン担当になる。ガーデンは学校スタッフとのジョイントの事業と位置付けられた（経費の見積約40,000ドル）。

< 1998 ~ 1999 > 実現期

- 1～3年混合クラス、4～6年混合クラスの実現（担任は2名ずつのチーム・ティーチング）。
- 言語教材SFAの継続。
- 実験・探究による理科の教授法と実験室、放送スタジオの設置とに新たに助成が出る。
- 戦略策定会議メンバーは15名。内訳は校長、教師・スタッフ7（8）名、父母6名、地域住民1名。（カッコ内の数字はスタッフ兼父母のT・デントンを加えたもの）
- PTOはプレイグラウンドの建設とガーデンの計画最終段階。そのための資金集めにも力を入れた。プレイグラウンドにかかった費用は約35,000ドル。
- PTO会長はT・デントン。この年からボランティア・コーディネーターとして学校のスタッフも兼ねるようになる。
- この年のPTO参加行事・会議の主要内容
  - ・オープンハウスとアイスクリームパーティー
  - ・算数パーティー（家族も加わり各種算数ゲームを楽しむ夜のイベントMath Night）
  - ・リーディングパーティー（家族も加わって朗読の発表などをする夜のイベントReading Night）
  - ・学校改善会議
  - ・戦略策定会議（2日間）
  - ・校名検討会議
  - ・PTOミーティング（5回）
  - ・資金集め検討ミーティング
  - ・プレイグラウンドの建設（3日間）
  - ・プレイグラウンドパーティー
  - ・資金集めの活動（キャンディー・セール、ブック・セール、ポインセチア・セール、ピザ・セール、雑貨カタログ・セール、プラント・セール、レストラン貸切パーティー、アルミ缶集め、スーパーのポリ袋回収）

< 1999 ~ 2000 > 移行期

- 年齢混合のクラスは1～2年、3～4年、5～6年の2学年ずつに変更。州統一のMEAPテストに対応するため。
- SFAの言語教材から、カラマズー市共通の教材・言語プログラムへ変更。継続についての教育長のサポートが受けられないため、打ち切り。
- マグネット・スクールのテーマがMultiage, Continuous ProgressからInquiry MethodのScienceへ変更。
- PTO会長が変わる。静かな活動の年になった。最初のミーティングではPTOが銀行に当座預金口座をもつべきか、学校行事に出すおやつを何にするかなどで議論になる。その後参加者は減少傾向。



- 1 Bronfenbrenner, Urie. 1979. *The ecology of human development*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 2 バットナム R.D., 2006, 『孤独なボウリングー米国コミュニティの崩壊と再生』 柏書房. 柴内康文訳
- 3 Skocpol, Theda. 1999. "Recent Transformation of Civic Life." In *Civic Engagement in American Democracy*, edited by Theda Skocpol and Morris P. Fiorina. Washington, D. C.: Brookings Institution Press.
- 4 Michigan Educational Assessment Program (MEAP)とよばれる。
- 5 父母活動の中心人物の一人 F・コ克蘭によれば、エンストロム校長を採用する際のインタビューで「私のために残された学校がある」と、それまで大規模校で成果をあげてきた実績をなげうって応募してきた彼女の意志に感動を覚えたという。(F・コ克蘭へのインタビュー、2001年6月17日、コ克蘭宅) 前任校でも「貧困層の子どもだから学力が低いのは当たり前だという見方をするのはまちがっている。」と新聞記者に述べている。(カラマズー・ガゼット紙、1996年5月26日付)
- 6 エンストロムが一度選任されたあと、教育委員会は「選考過程の不備」を理由に承認を取り消し、校長職を再募集した。応募者が出なかったという。コ克蘭は前任校長のときに子どもを私立学校へ転校させることも考えていたが、エンストロムのダイナミックでエネルギッシュな話に好感をもったので、教育委員会に相談に行った。担当者はエンストロムの連絡先をコ克蘭に知らせた。コ克蘭はエンストロムに電話し、ウッドワードの人々がエンストロムを待っていることを話し、応募を再考するよう促した。
- 7 校区内の住民の人種的不均衡を軽減するために生まれた制度。本来の通学区域外の生徒も希望・選択して学校に通える制度。学校は連邦政府から多額の助成を受け、特色あるプログラムの策定が求められる。ウッドワード小では、校区内に住む児童は原則的にウッドワードへ通学し、他の校区の希望する児童がさらに加わっている。定員を超えると抽選となる。
- 8 エンストロムの卓越は、2001年に母校のウエスタンミシガン大学から表彰を受けるほどであった。
- 9 PTAは全国組織であるのに対し、PTOは各学校単位で活動を行う組織である。
- 10 PTO活動とボランティア・コーディネーターの仕事の区分はあいまいになりやすいものだったが、デントンは混同しないように気を配った。また週15時間という契約も、その時間では実際には収まりきらない内容だったという。
- 11 カラマズー・ガゼット紙1996年5月26日記事でのエンストロムの発言より。
- 12 エンストロムへのインタビューより。2001年6月6日、ウッドワード小学校
- 13 同、エンストロムへのインタビューより。
- 14 同、エンストロムへのインタビューより。
- 15 同、エンストロムへのインタビューより。
- 16 同、F・コ克蘭インタビューより。
- 17 同、F・コ克蘭インタビューより。
- 18 T・デントン & F・コ克蘭インタビューより。2001年6月17日、コ克蘭宅
- 19 同、F・コ克蘭インタビューより。
- 20 同、F・コ克蘭インタビューより。
- 21 同、F・コ克蘭のインタビューより。
- 22 1999年カラマズー学区全体のボランティア表彰式でのパンフレットへの記載。150人分の弁当については、同上のインタビューでは、次のような話をしている。「4日間のボランティアへの昼食担当者はエミリーだったが、毎日ホットドッグにするつもりだと聞いた。アンジェラに相談して、スーパーで食材を買い、またフライドチキンの寄付もお願いした。寒い日だったので、屋外の作業に何か温かいものがあるといいと思った。私たちはボランティアで友人だったり子どもが同じ学校に通うどうし、役をやめさせるわけにもいかず、悪く言うわけにもいかない。議論になるのを避け、マーゴに電話してもらった。」
- 23 黒崎勲『学校選択と学校参加ーアメリカ教育改革の実験に学ぶ』東京大学出版会、1994年
- 24 <http://www.michigan.gov/mde/0,1607,7-140-5233-23090-,00.html>
- 25 Crawford, Susan and Peggy Levitt. 1999. "Case of the PTA." In *Civic Engagement in American Democracy*, edited by Theda Skocpol and Morris P. Fiorina. Washington, D. C.: Brookings Institution Press.
- 26 Skocpol (1999, p.499)
- 27 情報源は主として先の諸インタビューおよびウッドワード小ニュースレターによる。